

勉学と卓球に打ち込み、 子供時分より 粘り強さを発揮

弁護士、ゴルフジャーナリスト。西村園彦の名刺には、2つの裏書きが記されている。40歳から始めたゴルフに魅了されてからというものの、西村の。戦場。は公私共にゴルフ場となった。バブル崩壊後、相次いだ日本の大型ゴルフ場倒産事件は、ハゲタカ金融業者たちの特権と化した。西村は、その法的再建問題に黙然と立ち向かってきた。またプレーヤーとしては、難コースとして名高いニュー・セントアン・ドリュースゴルフクラブ・ジャパンのクラブチャンピオンに輝いたほどの腕前で、ゴルフジャーナリストとしても健筆をふるう。どちらも。戦いの場。筆を上げて語る熱血漢ではないが、生来負けず嫌いの西村は「難攻不落に思えることほど燃える」。どんな苦境でも決してあきらめず、粘り強く戦い抜く——西村の真骨頂はここにある。

から、それはそれで過酷なスポーツではあったんだけど……。

僕は、父が教員をしていた中・高一貫校である桐朋学院に通いながら、けこう真面目に勉強にも卓球にも打ち込んでいました。中学2年の時のこと。都内中学校の卓球大会があったのですが、僕は、優勝候補だった3年生を相手に2回戦で惜敗。それが悔しくてねえ。よほど刺激されたのか、負けず嫌いなのか、その悔しさを翌年まで胸に刻んだ結果、翌年の私学都大会では個人も団体戦も総ナメですよ(笑)。リベンジを果たしたわけです。もう大昔の話けれど、今でも試合のあった国立競技場の辺りを通ると、厳肅な気持ちになるんです。「志を持って必死にやっているか。途中で投げ出していないか。」そう問われているような気がして、僕の起点はここにあるのでしょうか。始めた何れでも一途にあるというか、粘り強さは子供の頃からありました。加えて園環の世代です。受験も含め、競争、競争のなかで生きてきたから、「やる以上は勝ちたい」という負けず嫌いな部分が強いの。もともと、性分としては、はにかみ屋。で、できるだけ目立たないように振る舞っていたんです。しゃべるのも苦手、講演なんて絶対に行けないようなタイプだったの。今、弁護士としてあちこちで登壇しているんですけど妙な感じですよ(笑)。

西村がパートナーを務める「さくら共同法律事務所」の代表弁護士・河合弘之氏とは、実に55年の付き合いだという。中学から大学まで同窓であり、卓球部では先輩後輩の間柄。西村が弁護士を意識するようになったのは、先輩・河合氏の影響が少なからずある。一貫して学業優秀だった西村は、東大法学部にストレートで進学した。

ものをコツコツ調べたり書くのは得意だけど、僕に営業的センスはないし、酒も飲めず付き合いも悪い。動め人には向かないだろうと思っていたなか、それでも食えるとしたら弁護士かなあ。法学部に絞った動機は、あまり褒められたものじゃないんですよ(笑)。大学に入ってから、勉強と卓球に打ち込んでいましたが、3年生になって、頃から東大闘争が激しくなってきた。講義どころじゃなくなりました。法学部から、安田講堂に立てこもった学生が20人もいた時代です。僕は基本ノンポリで、直接的な活動はしなかったけれど、シンパシーを感じていたから影響は受けています。公安に逮捕された連中に接見しに行くとか、面倒を見よとか、弁護士になる前から救援活動的なことをしていました。

司法試験に向けては、同期の仲間たちと勉強会を立ち上げてやったものの、

人生の軌跡



My Back Pages



1947年6月17日。
東京・国立市で誕生



西村氏の両親。
父は桐朋中学・高等学校の社会科教師だった



私立国立学園小学校では、「神童」と呼ばれたことも、その後、桐朋中学・高等学校へ進学。だんだん「普通の人」に。